



勝った人が大勢を持って帰る途中に危険が多い、それを次郎長は心配して少しでも危険の無いように子分の勇者で守らせて行き届いて客人にいろいろと世話をしたので、人々供名が高まっていた。

そんな華々しいことはないが、やっぱり大勢の子分に親分として立たれると、それは、それ相応の力量と人柄がなければならぬ。」と度量の広さをほめている。

また、逸話として

「明治10年代、桃川無林が上野広小路の吹きぬきという書店で次郎長を見ましたとき、毎日のうちにその高座の前に一見歎息する姿をした男が「へ、人来ていた。怪しげに聞いてみると、次郎長の子分衆で、もし少しでも間違ったことを云つたらすぐに高座に躍り上がりて責めたたず氣であつたらしい。無林は調査が行き届いていたので、あまり間違はないのに子分たちは感服して帰つて行った。」と書き承りしている。

これは逸話だが、次郎長は子分たちにこれほどまでに慕われていたのだとうことがよくわかる面白い話だ。次郎長は親分として子分を人前では叱らなかつた。子分への感情は厚かったから、子分たちも親分のため身を投するよりも辞さないほどの思いで結ばれていた。

## 侠客の正道を歩んだ

武士に武道があったように侠客には侠道があった。

次郎長には博徒登志の「強きを握き弱きを抜く」の義供心が伝統精神として脈々とながれていた。山岡鉄舟はそれを早くから貞抜き「精神強度」の書を贈った。

次郎長は明治維新という大転換期に多くの人たちと巡り会つた。あれほどの人物たちと、知り合い交流し親交を深めて参った侠客は他にいない。驚くばかりであった次郎長は侠客の正道を歩んでいたからだと思う。

社寺墓地境内に建つ「足利義満碑」は、元々船で海軍軍人の小笠原長生が次郎長に贈った語で任侠魂を如実に物語つている。

口ロナ禪の今、次郎長だったら…とよく問われる。次郎長はいつもなんぞぞくで、雄火に燃びひぶる平で庶民の視線であつたことは確かだ。

## 「口ロナ禪の一年での活動

さて、第二波、第三波と押し寄せても、雄火に燃びひぶる平で庶民の視線であつたことは確かだ。



## 「静岡での次郎長よもやま話」を聞いて――

報告 運営委員 北村昭夫

このようにして次郎長さんお出でが、まずは映画でお馴染みのアウトローの時代があります。そして明治維新以降には

清水港の整備や茶の輸出、莫過に富士大湊の開港など、多彩な社会貢献の話は色々な機会で見聞きしてきました。しかし不思議なことに旧静岡市内でのエビソードは意外と知られていません。そこ

で今は静岡の郷土史研究家である鈴木先生を、船宿未藏主催の恒例「次郎長講

日時 2020年10月7日 13時30分～15時

場所 清水港船宿記念館「末廣」

講師 あべの古書店店主 鈴木大治先生

（以下、鈴木先生の講話抜粋）

清水次郎長のお膝元へ静岡から賭場荒らじにやつて来た上士でドキドキします（笑）。次郎長については皆さんの方が余程知っているとは思いますが、静岡に伝わっている次郎長の話を、古本屋の主としての体験談を交えで話したいと

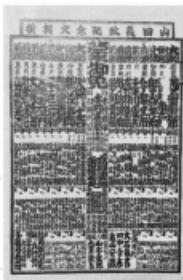
る現状の中、「生誕100年」と銘打つ企画も大幅な縮小や延期、更には中止を余儀なくされ、総会も中止せざるを得ませんでした。この様な厳しい状況において当会は感染拡大の防止策に十分注意を払いながら、「末廣」での恒例の次郎長講義会「開港記念講義・生誕100年記念

Tシャツの作成販売、市民の手彫りの次郎長鏡の木像の静岡市への寄贈の橋渡しをしました。またこうした次郎長鏡に関係する総合的な文化活動を評価され、静岡文化財団主催の「やまとひい地域文化活動奨励賞」を受賞するなど、明るい話題があつたので続けて紹介する。

四百

山田長政と大相撲興行

明治二十五年（1892）、駿府城内  
で次郎長が進呈元となり大相撲大会が開  
催されました。次郎長がとなる前年の  
事でした。その時の番付委員長と当时  
の大相撲力士が一賞に争ってい、チャ  
リティではなく本格的な大掛かりな興行  
だった事が分かります。この大会の目的  
ですが、その収益で山田長政の銅像を建  
てとあるという事でした。大変人気を集め  
た相撲場だったのですが、なぜかお金が戻れ  
らずに大赤字を出してしまったので、  
す。その理由は長いあいだ醸して、色々とい  
うのがある良からぬも立ちました。これらが  
日のごと日本の中から一枚の紙切れが出  
てきました。それはその相撲大会の優等  
券で、そこには「七月三日午から晴天七  
日」と日付が書いてありました。



駿府相撲番付表（写真提供　あべの古書店）



(写真提供 あべの古書店)

が書かれ、日付が八月五日があり更に九月にも見学したと書かれていました。これは七日間で終わる予定が二十四回位は掛かった事になります。

その間も力士達は遊郭に出掛けたり経費が掛かり、費用は興行方が持つてになりました。そんな結果で次郎長は大変な借金を抱えてしましましたが、番組の遊郭の主人たちが全額代りをしてくれたそうです。しかし元々は遊郭で遊んだ金ですのでキャラにしたという事だったと思います。それで銅像を造る資金を貯め込んだのが顎頭の由来でして、そこから「あべの古書店」と名づけられました。ではそもそも何故次郎長が山田景政の銅像を建てようと思ったのか?その理由が書かれたものはありませんが、この

巴川と安東文吉との関係

安東文吉（本名は酒谷文吉）は大変力のある親分であり、次郎長より一世代上の人物でした。賭場を開いていたある日のこと、若い頃の次郎長はそこでイカサマをやってしましました。それを見抜かれて賭巻きにされ殺されそうになった時、文吉親分は次郎長の貴賎を見抜き、「俺の目の黒い間は二度と静岡には足を踏み入れるな」と言い放ちました。しかし次郎長は静岡には何度も行っています。真偽はともかくその方法にして、川口が駿河府城まで繋がっている事で舟を使って川を通り、地面に足を踏み入れず静岡を行ったとのトチのよさない美しい話もあります。晩年の文吉は次郎長と銀鶴の脇腹との争い事を始めとするる次郎長の

## 臨濟寺仁王門の建立

臨濟寺仁王門の建立

異教のため東夷の運命となり、そぞうに臨済寺が申し出で譲り受けたのでした。その後「王像を納める」山門を造るにあたり、次郎長が資金集めをしながらはねのいて、ある本に山門の二階に彌陀が分かれていました。それが書かれています。そこにお願いし眞っ暗な山門の二階に彌陀が二十体ほど置かれました。恐らく他神社から同様に譲り受けた仏像であります。その周囲の壁には目的の山門建立時木の丸が沢山架かっていました。そして



臨濟寺仁王門

- 3 -

井宮監獄の話

次郎長は井宮監獄の受刑者を動員して草土開墾に着手したエピソードがありまます。たなづねは恐らく静岡刑務所やなづねにあった出張所の受刑者を使つたのではないかと思われます。ところがその次郎長が明治十七年に「賭博犯処分規則」により、事もあるうにその井宮監

その最初に「発起輪旋・清水・山本長五郎」と書かれた赤提の木札があり、史実をこの目で確認できた嬉しい瞬間でした。その当時の臨済寺住職は今川貞山で、彼はその後に久能寺（鉢舟寺）再建に努め初代住職に就きましたが、次郎長との親交が深い人物だった事が分かります。



写真提供 宗教法人 隆済寺 (無断転載禁止)



新門辰五郎 (1800 ~ 1875年)

### 新門辰五郎について

慶喜公の身边警護のために静岡へ来た新門辰五郎は、常磐町の浄土真宗大谷派の尊光寺に泊まっていました。また通り抜えた淨土真宗本願寺派の教覚寺には、当時静岡藩の勅定組頭を務めた浅沢

た山岡鉄舟や園田隆蔵の尽力により、

刑期の満了を得た二年半後放されました。

榮一が寄宿していました。辰五郎は次郎長の兄弟分の差を交わし、まだ慶喜公の頃は既に次郎長は足を洗っていましたが、代わったばかりの奈良原繁県令が事情を知らず、懲罰七年・過料金四〇〇円を科してしまったのです。しかしそれを知つてしまつたのです。再建しようと考え次郎長に協力を要請します。そして清水の米穀問屋「細伊」の平尾という番頭がこの資金集めのために奔走したといわれています。この劇場は後に若竹座と名を改め七間町の文化芸能興行の中心となりました。

・東海遊侠伝（天國龍藏）・次郎長（野沢広行）・実説次郎長物語（河原井喜久雄）・徳川慶喜家扶日記（前田匡一郎）・駿河遊侠傳（山田實譲）

### 一次郎長翁の木像

次郎長養生庵二〇〇年記念の一環として、次郎長翁を知る会が静岡市へ「次郎長翁」の木像を寄贈した。

木像の制作者は清水区の西谷公豊さん（七十八才・真言石から二人目）

氏子総代会長を務める文珠稻荷神社（桜橋）にある市指定天然記念物のクス

を剪定した枝条を使い、梅座寺の次郎長銅像を参考に彫りあげた。

その後、西谷さんの自宅に保管していたが、生誕二〇〇年を機に次郎長翁の功績に光を当さないと当会が提案し、市に寄贈する運びとなった。

終わりに



静岡市役所静岡庁舎にて

# 静岡県文化財団「第三十四回ふじのくに地域文化活動奨励賞」を受賞！

令和三年三月六日、静岡市駿河区のグランシップで表彰式があり、所用があった山田副会長と山本が出席し、鈴木壽美子理事長から表彰状、盾と賞金が授与されました。

この「ふじのくに地域文化活動賞」は静岡県文化財団が「県民文化の振興を通して県民生活の向上と活力ある郷土づくりに貢献するため、県内外各地で優れた文化活動を行っている団体を表彰」しているもので昭和六十二年度から行われていて今回が三十四回目となりました。

今年は、千団体か

ら応募があり、我が会のほか、草津市の「古鑑井に親む会」なる計六団体が受賞しました。

我が会の表彰理由は「市民の手で郷土が生まれた次郎長翁の



授与式後、鈴木壽美子理事長と

## 次郎長が結んだ 西洋医師・植木重敏と

### 我が山本家の縁

次郎翁翁を知る会 山本量正

はじめに

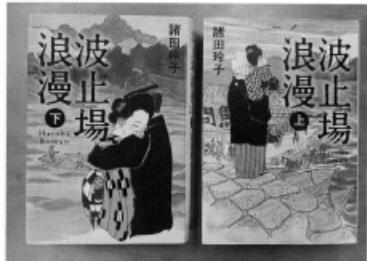
明治維新後の次郎長のいわゆる「社会貢献」の中で、「清水港の発展」、「富士裾野の開墾」と並んで特筆されているのが「西洋医院の説教」である。この西洋病院の主人公が土佐須崎（現在の高知県須崎市）出身の医師・植木重敏氏（以下敬称は略させていただきます）で明治十九年（一八八六年）、二十二歳で東京大学医学部別科を卒業後、帰つて清水港本町三丁目番地に故郷の先祖・醫師・渡邊良三と「演衆講義」を開いた。この植木重敏が我が山本家の強い縁が何年間の資料（両家の書類帳や手紙のやり取り）によつて明らかになってきたので少し書かせていただきます。（なお、通説では次郎翁が横浜からの帰りの船中で土佐に寄りついでいる「植木」を口説いたことになっているが、これは誤りの元

三月発行の会報「次郎長 第六回の『次郎長が植木重敏を説教して清水に医院を開業させた』などの記述が基になっていますので、実際は植木重敏の孫子孫植木豊氏の詳細な研究（「植木家先祖と歴史（上）・（下）」の中での辺の真相が明らかにされてるのでご参照ください。」



「植木家先祖と歴史」（この著書は清水中央図書館に寄贈されている）

植木重敏について



諸田玲子著「波止場漫遊」

この植木農氏の著書に先立ち、静岡出身の作家・諸田玲子氏の「波止場漫遊」が日本経済新聞に平成二十五年（2013）四月から平成二十六年（2014）七月まで連載された。次郎長の姪で義女になったおけんちゃん

る。植木農氏も付け聲で頷く。諸田氏との鼎談も楽しいものであった。

「マリンビル」でおよそ七〇〇人を集め  
て開催されたのはまだ記憶に残ってい

儲けた。昭和三十四年（一九〇一）詔勅  
退任後は横濱、神戸、京都で開業した。

我が「山本家」とは相<sup>互</sup>親密な關係があつたと推測される。第一の接点は明治十九年に「齊家医院」を清水本町に開業したことに、第二の接点は私の祖父「山本昌平」が妹「恒<sup>子</sup>」が三代目お妻のいわば「孫」ともいづべき「入谷謙助」と結婚した際に

「第一の接点」 前記のとくに植木重  
山がながりである。

中実」と「虚実」を取り混ぜた興味深い連載であった。それが単行本として出版されその記念イベントが平成二十七年元年（1864年）六月二十三日土佐藩士の長男として生まれた。明治十九年（1886年）東京大学医学部別科卒業

(20-15) 一月三十一日、波止場の

東京に帰った後も植木重敏は清水に残り、「清水港海岸通り」（元の「未廣近ヶ浜」）に植木医院を設けた。明治

「二十五年（一八九二）には「有度郡医会  
会長」も務め、明治二十八年六月十二日

著「波止」の次郎長の死を看取ったともいわれて  
いる。二二三〇年三月廿二日

著者　諸田玲子（よしのり　るいこ）  
（一八九〇年四月生、西宮郡山梨村、今後の袋井）

市)の「舞鶴のそと」と結婚し横浜に移った。この間足掛け九年間清水に在住し

た。横浜では横濱市役所長を歴任し、この横濱時代に「人娘（初子）」を

山本家との交流

前記のようすに都合二十四年間の清水での医院開業の間に当然数多くの患者を診察し、地元名士との交流があったと思われるが、これまでに見つかった資料(香典帳や手紙のやり取りなど)から

〔藤原信玄〕郎(日比忠之郎)の次女「あむ」を両義子で迎えた。つまり、「清衆医院」は私の曾祖父・山本清五郎の妻「あむ」の夫家の筋向いであり、また「日本第一」と同じく本町通りで近接して

家康から特許を受けた造船問屋の一つ「山本屋清右衛門」の子孫で同じ本町通りにあった。(済興院の南約一〇〇疋の所で現在地(同じ)たゞ、幕末に直系が絶え、明治五年(一八七二)、同じ廻船問屋の「福澤屋六右衛門(山本六右衛門)」の三男「清五郎」と前記の

船問屋が立ち並ぶ本町通りのほほん中、「本町三一五番地」に開業した。この場所は元通船問屋「山本三四郎宅」で、その真向には篠屋与平（鈴木与平）、筋向いに篠山屋三郎（日比谷三郎）の邸敷があった。我が山本家も徳川家康から特許を受けた通船問屋の一つ

【日本医清石衛】の子孫で同じ本町通りにあった。(済衆医院の南約100m)

の所で現在地(同じ)なたへ、幕末に直系  
が絶え、明治五年（一八七二）、同じ廻  
船問屋仲間の「播磨屋六右衛門」(山本六  
右衛門)の三男「清五郎」と前記の  
「播磨屋清五郎」(山本六右衛門)、つまり

「あれ」を面義子で迎えた。つまり、

「済衆医院」は私の曾祖父山本清五郎の妻「まさ」の実家の筋向いであり、また

「日本家」へは同じ本町通りで近接して



二十四歳、まだ前述のとおり大正七年、

妹「恒」が八谷輔助と結婚している。昭和三年（一九二八年）公選最初の第二期

清水市会議員に立候補し、同年の海藏寺の初代次郎長蔵像建設にも主導的役割を果

たしている。植木重敏が清水を離れたのはこの翌年である。

### 八植木重敏との繋がりの深さの証左▽

以上、つながりの概略を書いてきたが、その証左を山本家、植木家の香典帳（謹吟帳）や両家の間の書簡のやり取りを基に時系列的に説明してみたい。

①まず第一は昭和二年（一九二七年）一月二十五日の曾祖父・山本清五郎（行年七十五歳）の香典帳である。



「山本清五郎香典帳」

香典帳の一枚目の最初から裏面（三番目）に植木重敏の名前で「三田」とある。因

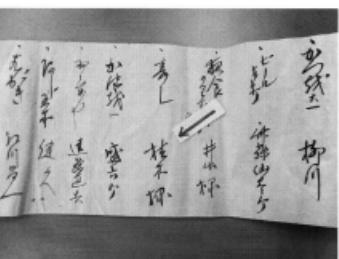
みに、一番目は當時「山本清五郎商店」の主取銀行であった沼津銀行で三田、二番目はその役員の大久保忠雄（取扱）と江藤林太郎（沼津銀行常務）が連名で三田である。五十銭、一円、一円という金額が多い中で三円という額であってさ

らに単なる儀式的付き合いではない証拠に次の通り初七日から三回連続ですべての法要に香料を渡している。初七日（一円）、四十九日法要（一円）、昭和

二年七月初盆（一円）、昭和三年一月

二十日の一周年（一円）、昭和四年一月二十日の三回忌（一円）。※この三回忌は我が山本家の祖先、「月懸貞雪博士」の三〇〇忌も兼ねていた。

二十日の三回忌（一円）※この三回忌は我が山本家の祖先、「月懸貞雪博士」の三〇〇忌も兼ねていた。



「市議会議員當選祝儀帳」

である。

※この如意帳の内容は意性の感言が気

づき炎家の業のようであるが、この詳細については植木重敏の解説および解説が後日かかるべきとして発表される予定である。

②第二は昭和三年五月の祖父・山本量平の清水市会議員当選祝儀帳である。

③第三は植木重敏からの昭和四年五月九日消印の封書で、内容は山本量平の次男・山本鶴之助の処方箋である。相手はその年の初めごろ神戸に転居した

ようであるが、量平はかつての「かがりつけ医」である植木重敏に手紙で症状を伝え处方箋を書いて送つてもらつたものと思われ、手紙のやり取りで处方箋を書いてもらつたものと思われる。

④第四は昭和四年七月十七日の曾祖母・山本まさ（行年七十四歳）の香典帳で名古屋市中区に転居した植木重敏から二円頂戴している。

⑤第五は昭和七年（一九三二）四月二十日消印の封書で植木重敏の長女初子の死去に伴う追悼文「志のぶ草」が夫真陽との連名で送られてきている。

なお、この「志のぶ草」の原本は植木豊氏によれば確認できる唯一の物で、氏の「植木家先祖と歴史」の下巻の冒頭に全文が紹介されている。※植木重敏は、初子の死から間もなく昭和七年（一九三二）四月二十九日に死去した。

清水市 清水町本町  
山本量平林

株式会社  
同様 本  
販賣  
部

昭和十二年三月十五日

(6) 第六は昭和十一年三月十五日、量平の長女山本みづ（行年十六歳）の香典禮である。みづは大正十年生まれ。女子学校在学中に死んでしまった。植木重敏は昭和七年に死去しており、妻の植木信子（のぶこ）名で二田頃戴している。

※時時亭は高智郡山梨町上山梨（現在の袋井市）の実家に在住。

(7) 第七は植木家に関する昭和十六年（1941）十二月十日、植木重敏の妻・植木信子（のぶこ）（行年七十一歳）の香典帳である。山本屋名三田ある。この他に清水からは山田昌美、入谷助などの名もある。

△最後△

大正七年（1918）に結婚した恒と麟助の間には、大正八年に長男啓一、大正十一年に次男鶴治が生まれた。啓一は名古屋大学を卒業し陸軍大尉で昭和二十

年（1945）三月二十日（イギリス）・レイテ島で戦死。鶴治は早稲田大学から学徒出陣し海軍中尉で昭和二十年八月十六日（終戦の翌日）高知県夜須町の靈洋隊（特攻隊）の基盤で不幸な爆発事故に巻き込まれ戦死した。入谷恒は二人の息子に先立つ昭和十九年十二月二十三日四十九歳で没している。

本町の我が家は岡鉄舟が次郎長になり、また書『酒女富貴はだれもみんない好きが楽しめばこのうちはなし』が届けられて残っているがこれは「恒」を介してもらたらされたものである。



## 渋沢栄一の周辺と次郎長

運営委員 中田 元比古

身が欧洲で視察した小資本を集めて大資

本とし殖産事業を興す合本主義になら  
い、金融機関を設立して地域経済を活発  
化させるなどを提案した。そして善の旨

用金と善の豪商から資金を集めるた  
めの合本組織として、紺屋町に商法会所  
を設立し自らが頭取となって采配を握  
る。運用金は駿府藩七十七万石へ割り  
当てられていた大政官札七十七万石（実際  
は五十三万石とも）。物資の調達を務め、  
その資金となる大政官札の弊害を引き受  
けたのが松本屋平右衛門であった。渋沢

の提案した商法会所は着々と利益を上げ  
事業も各方面へと広がった。駿府の町人  
たちも預金して利子を得ようとする者も  
増えその便利性を知る事になった。

この駿府での収穫は目をつけた大隈重  
信に譲られ、渋沢はが政府に仕えて  
ゆくこととなる。その後の近代日本経済  
における功績は言うまでもない。

その渋沢の隣地の築込本屋は、明治  
四年に四十一才で非業の死を遂げた。太  
政官札をめぐる追及に心労し命を縮めた  
といわれれるが、真相は分からぬ。

平右衛門へ。慶喜公の護衛役の新門辰五郎と次郎長を松本屋の敷に「引き合」で、譲讓が解けて清水蒸への御祓の慶喜公を護衛する引継のお膳立てをした。次郎長への慶喜公の護衛役の話は、山岡鉄舟あるいは松岡萬の進言という說もあるが、辰五郎も渡沢も慶喜公の身辺で面識があり、筆者は渡沢から平右衛門へと相談があったとの一説を加えたい。

計報

林仁山氏（清水区・臨濟宗妙心寺派梅蔭寺住職）が令和三年一月八日にご遷化されました。享年七十四歳。林氏は、次郎長翁を知る会の設立癡起人の一人でもあり、又、以降副会長を常任。毎年次郎長翁の命日に行つ供養もお勤め頂きました。特に廿七墓建立一五〇年祭には、副住職の泰山氏と弟子で丁寧な法要をいとなまれたのが印象的でした。あらためて感謝の念と追悼の意を表します。



平成30年9月17日(祝)篠地町社士葬にて

で分かり易くなつてゐる。  
クレジットこそ無いがこの本の監修に  
山田会長も中田運営委員が協力した。  
この本のp.15「次郎長と鉄舟」とp.62  
の年表において、二人の出会いを由比

【編集室から】

・食報四〇号をお届けします。詳しく  
掲載できませんでしたが、船宿資料館  
『未廣』が活版際に復元されて二十周  
年を迎えております。

御歎賞とする御評述がある。この評述は、会の会報第二号にて取り上げているが、これは望月家・松木家ののみの家臣団であり史実認定が不確かなところ、当会は現在この説に懷疑的な立場を取っている。「かりそめにも教本として扱うならば不確実な伝承の掲載は不適切」と記述の削除を求めたが、残念ながら叶わなかつた。郷土の偉人としてのクロースアップは大切なことだが、新たな歴像を生まぬよう自らも戒め、今後も眞の史実への探求に励みたい。

次郎長翁を知る会  
会報「次郎長」40号

令和3年6月1日発行

福島  
次郎長翁を知る会

(公財)するが企画観光局  
清水事務所内  
〒424-0806  
静岡県静岡市清水区辻 1-1-3-103  
Tel 054-388-9181 Fax 054-388-9182  
[www.jirocho.com](http://www.jirocho.com)  
[minowa\\_jirocho@gmail.com](mailto:minowa_jirocho@gmail.com)